

抗議・要請書

玄海 3 号機蒸気漏れ事故に続く 4号機一次系冷却材ポンプ事故 私たちの不安と不信は募るばかり 再稼働中止を求める

2018 年 5 月 9 日

(株)九州電力 代表取締役社長 瓜生道明 様

玄海原発プルサーマルと全基をみんなで止める裁判の会／プルサーマルと佐賀県の100年を考える会
玄海原発反対からつ事務所／原発を考える鳥栖の会／今を生きる会／原発知っちょる会
風ふくおかの会／戦争と原発のない社会をめざす福岡市民の会／たんぽぽとりで
東区から玄海原発の廃炉を考える会／福岡で福島を考える会／あしたの命を考える会

5月2日、再稼働へ向け試運転中の玄海原発4号機で、放射性物質を含む一次系冷却水を循環させるポンプ2台で、流入防止用の水の流量が通常の2倍にも増える異常が見つかったと、5月3日夜に報道があった。

約1か月前の3月30日には再稼働直後の3号機で蒸気漏れ事故を起こしたにもかかわらず、原子炉を止めず、配管の総点検もしないで4月17日に発電再開を強行した直後の今回の事故に、私たちの不安と怒りは増大するばかりだ。

九州電力に対して強く抗議するとともに3・4号機の再稼働中止を求める。

今回異常が発生した2台のポンプの「シール部」は今年1～3月に新品に換えたばかりだったというが、なぜ事故は起きたのか。点検で見落としがあったのではないのか。部品交換だけで済まされるのか。残りの2台は分解点検しないのか。同じ部品を使っている3号機も運転を止めて点検しなおすべきではないのか。構造的欠陥があるのではないのか。

4号機は2011年12月25日以来6年4か月停止しているが、長期停止の影響はないのか。

ポンプが破損し、冷却材喪失、放射能放出につながる事故に発展していた可能性はなかったのか。

九電は事故についてこれまでに公開したのは概略図1枚だけであり、どのような事故であったのかほとんど分からない。シール水の流出量のデータや事故原因について明らかにし、住民に丁寧に説明する責任がある。

自治体・住民への通報連絡体制も問題だ。2日16時に「異常」が発生したが、自治体への最初の通報は、「再稼働工程に影響する可能性が出てきた」翌3日11時だった。異常発生から19時間も経ってからの連絡だった。

佐賀県の副島副知事は蒸気漏れ事故の際に「空振りでも結構なので、日頃と違う状況がある段階で本県に連絡を」と九電・山元取締役役に要請した。九電は今回「今までなら分解点検が決まった段階(3日13時10分)で連絡するので、早く対応した」という。しかし、事故進展が早ければ、報告すべき案件か判断している間に遅れるということがありうる。「異常発生」後ただちに通報しなければ、住民は放射能から逃れることが困難になりかねない。

同様の事故は全国原発で相次いできた。玄海原発1号機では1999年1月に通常運転中に同様の事故が起きて、原子炉を停止した。最近では2016年7月に再稼働に向け調整運転中だった四国電力伊方原発3号機で同様の事故が起きた。

異常のあった一次冷却材ポンプのシール部は、圧力に耐えている部品同士が相対的に移動しあっており、内

部から液体が漏れるのを防ぐのは至難だと言われている。元東芝の技術者・小倉志郎さんは伊方の事故後、「一次系冷却材ポンプのシール部は、原発のアキレス腱だ。恐ろしいのはこの構造的欠陥、ポンプの軸受け部のシール技術の未確立から繰り返されてきた水漏れ故障事故が、冷却材喪失事故に直結する可能性があること」だと指摘している。

ひとたび放射能を放出するような大事故になれば、私たちの大地や自然、水や食べ物がすべて汚染され、取返しのつかないことになる。

今回の事故を警告として重く受け止め、大事故が起きる前に再稼働を中止すべきである。

【 要請事項 】

- (1) 玄海原発 3・4 号機の再稼働を中止すること
- (2) 事故の原因や影響について、自治体と住民に詳しく説明する場を設けること

後日、上述の疑問や本要請に対する回答の場を求める。